◆飯塚ひろし　選

会報三月号より

寒灯下推敲重ね季語削る　　奥脇弘久

兎に角可笑しい俳句である。江戸期は季題、現代は季語と言い、完成されたものを季語と称する。削るべきは季語ではなく措辞。季語を削るなど本末転倒で言語道断。寒灯下で「季語」を削っている姿は鬼気迫るものがある。読み返すほどに、可笑しさが倍増する。

凍滝の黒き腹をば晒しけり　　入江澄泉

日頃は滔々と水が落下し、隠されていた腹が、滝が凍ったため、白日のもとに曝された。「滝はあんなに腹黒だったのか、意地悪そうな色だね」などと人々が噂する。腹黒いのがバレたら仕方ない。「腹黒く産んでくれた親を恨みます」などと凍滝を擬人化して、大いに読者を笑わせる技法は、寄席の真打である。笑いはにんまりと微笑むブラックユーモアである。

着ぶくれの犬に引かれて散歩かな　　田村米生

犬は元来、立派な毛皮を着ているので、寒さに強い。「外は寒いから」と犬にスーツにコートまで着せた。ご主人も着膨れているから、なお可笑しい。日頃運動不足のご主人を犬が引っ張って行く。よく見れば、お犬様の顔がご主人にそっくりなのは、大いに笑える。散歩でご主人の先を歩くのは駄犬である。

◆三橋百笑　選

朝日新聞、日経新聞の俳壇より

工学部では習はざり虹の橋　　田中淳也

尊厳の父にあーんと冷菓やる　　渡部　澪

本堂に由緒正しき隙間風　　佐藤　茂

着膨れて八人掛けに八人も　　保坂倶孝

五回目のトイレで起床お元日　　二宮　宏

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

私は二回で済んだ日は拍手です！

さう言へばキスはごぶさたクリスマス　藤島光一

因みに私達、ハグなら日常茶飯事のことですぞ。心の健康のためにおすすめです。

梅の花低きは人の顔集め　　三橋百笑

啓蟄やわれも遅れて穴を出る　　三橋百笑

ラストの二句は、自作。八木会長の横浜ランドマーク俳句教室で高得点だったものです。たまには、自分を褒めてあげたい。「これは名句です」。

◆日根野聖子　選

小西瑞穂　句集「雛の間」

球根を植ゑて誰にも告げざりき

大きすぎるタクシー会社の新暦

枝矯めて花に触れさす車椅子

雛仕舞ふ戦の記事の新聞で

遠足の列をなかなか横切れず

滝飛沫不動明王結跏趺坐

風鈴の舌の疲れを直し吊る

画材の石榴裂けたると裂けざるを

木漏れ日を増やす葡萄の房摘みて

蝿のゐるときにはなくて蝿叩

島の過疎なげく盆僧読経終へ

百円店定規を買ひて文化の日

墓参して父母なき生家には寄らず

待合室咳する人を避けて座す

手袋の失せし片方執着す

車椅子昨日と同じ片蔭に

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

鈴虫のサンプル郵便局で鳴く

義経にこだはつてゐる菊師かな

辣韮を漬ける匂ひの二階まで

海に遊ぶ母の日傘を基地として

メロン切るを忘れしままに子等帰る

鉄塔の真四角の基礎げんげ田に

ハンカチを取出し貰ふ蕗の薹

くだかれて毒茸の毒ちらばれり

　著者は、昭和五年、愛媛県生まれ。昭和二十七年「天狼」「炎昼」に入会。平成六年、「天狼」「炎昼」の終刊によって「ぐろっけ」に入会する。山口誓子、谷野予志、品川鈴子に師事し、亡くなる数年前まで句作を続ける。

　この句集は、三月号でご紹介させていただいた小西領南氏の夫人の遺句集である。あとがきに、「『私は俳句と結婚したのか』と愚痴とも冗談ともつかぬことを言っていましたが、本当に俳句が好きなようでした。名利を求めるでなく、三人の師の、添削やご指導を、よく理解して感謝していました。」とある。俳句を愛し、俳句が、日々の生活の中に、空気のようにごく自然にあったことが伝わってくる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。